# 七渡瀬遺跡発掘調査報告書

1987年3月

島根県金城町教育委員会

# 七渡瀬遺跡発掘調査報告書

1987年3月

島根県金城町教育委員会

# はじめに

金城町波佐は，古来から「長田別符」「長田保」「波佐庄」として繁栄した土地であります。一昨年，ほ場整備の工事中，長田郷から多数の土器片が出土し，緊急調査の結果，縄文時代から中世の遺跡と判り，その状況は『遺跡分布調査報告書―波佐・長田地区―』Ⅰ（1986年）の中で報告したところであります。

さて，昨年５月，大字波佐の民俗資料館隣接の水田に，地場産業技術研修センター建設工事が着手され，基礎工事のため掘削中土器片が多数出土しました。ただちに，建設工事を中止し，島根県教育委員会のご指導により緊急発掘調査を行い，その成果を報告する運びになりました。

この遺跡からの出土品は縄文時代から弥生時代のものが多く，長田郷遺跡の遺物と関連して，この地域の古代文化を解明する貴重な資料として，また，本町文化財保護行政の発展に役立つものと思います。

ここに，その調査の実施にあたり，特段のご指導ご援助を賜りました島根県教育委員会並びに関係各位のご協力に対し，深く感謝しお礼を申しあげます。

昭和62年３月

金城町教育委員会

教育長　水崎　斉

# 例　　言

1．本書は，金城町教育委員会が実施した金城町地場産業技術研修センター建設に伴う七渡瀬遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，昭和61年６月９日から20日の間，延べ９日で行った。

3．調査体制は以下のとおりである。

調査員　西尾克己（島根県教育庁文化課主事，調査担当）
隅田正三（西中国山地民具を守る会）
岡本利道（　〃　）

事務局　岡田義徳（金城町教育委員会教育次長）
河野文影（　〃　社会教育主事）

協力者　宇川徳美（金城町文化財保護審議会委員）
一町仁市（西中国山地民具を守る会会長）
上田房一（　〃　副会長）
柳浦俊一（島根県教育文化財団）
木原　光（益田市教育委員会）
新海正博（島根大学学生）

4．調査にあたっては，事業関係者をはじめ，地元各位の協力を得た。

5．本書の作成は西尾，隅田，柳浦の３名が協議して行った。
なお，黒曜石の分析は島根大学 三浦清教授に依頼した。

6．出土品は金城町立歴史民俗資料館で保管している。

# 目　　次

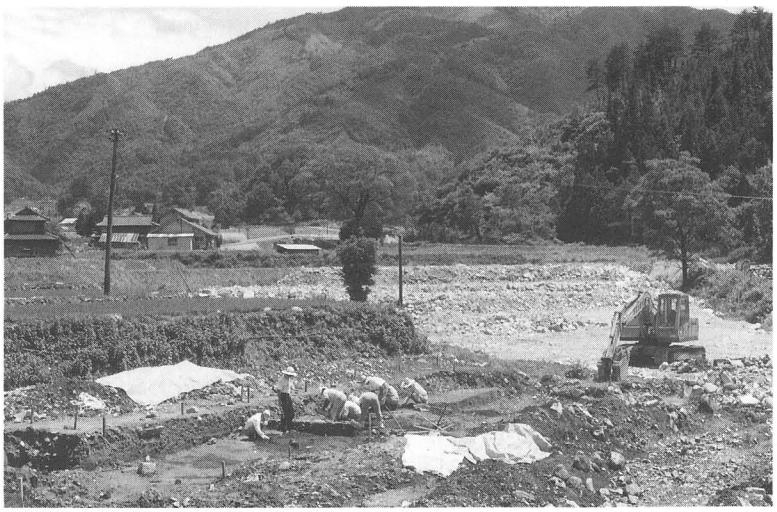
Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．地理的・歴史的環境 …… 2
Ⅲ．遺跡の概要 …… 5
Ⅳ．小　　結 …… 12
金城町七渡瀬遺跡から出土した黒曜石片の原産地について（三浦　清）…… 13

# Ⅰ．調査に至る経緯

金城町では，昭和61年度において，まちむら活性化対策事業（国補対象）の一環として金城町大字波佐イ425番地に地場産業技術研修センターを建設することになり，請負業者により床掘り作業が開始された。

昭和61年５月８日，工事現場において町の文化財保護審議委員によって弥生土器が発見された。この時点で，敷地大部分がすでに掘り起こされており，未着手部分は約80㎡と僅かであった。町ではただちに工事を中断し，遺跡の保護について，事業発注課である農林商工課，島根県文化課と協議を重ね，建物の配置を最小限２ｍ移動することによって，42㎡の発掘調査をすることの結論に達した。町教育委員会では建設事業の工期も勘案し，早速発掘調査計画をたて，体制に入ったが，肝心の調査員については町教育委員会に発掘調査のできる専門職員が配置されておらず，石見部にも数少ない専門職員に依頼したが，良い結果が得られず，県文化課と再度協議を行った。この間，現地では掘り起こされた土砂の中の遺物を採取した。また，遺跡の名称についてはこの付近が七渡瀬（ななわたせ）という小字であるため「七渡瀬遺跡」と名づけた。

一方，県文化課にもご尽力を頂き，多繁の中，職員の派遣をうることができ，調査を進めることが可能となった。現地での発掘調査は昭和61年６月９日から始まり，同月20日に無事終了した。その間，関係者各位から多大の協力を得た。　　（河　野）



調査風景（北西より，後方の山は大佐山）

# Ⅱ．　地理的・歴史的環境

金城町波佐地区は，西中国山地国定公園の大佐山（1,069m）の西北山麓に位置している。この地方は，西中国山地の脊梁山地（冠山）にあたり，地質的には西南日本内帯に属し，地質は後期中世代の酸性凝灰岩類とこれに貫入する閃緑岩及び花崗岩などの火成岩を主体として日本海側へ急傾斜している。県境を中心とする大佐山近辺の広島県側には1,000m前後の緩斜面が分布しているが，島根県側では急斜面をもって周布川谷底地に臨んでいる。

主要な河川である周布川は，弥畝山（1,036m）に源を発し，大佐山，大潰山，鷹巣山，雲月山など900m前後の中高陵間の山脈が四方を囲んでいる波佐地区の中央部を流下し，谷合を刻み，河川も急流となって日本海へ注いでいる。

この地域，特に波佐地区を中心とした盆地には，古代から近世までの多数の遺跡が残されている。古代からの交易関係を考えるとき，西中国山地近郊の遺跡の分布状況を時代毎に概観して行きたい。

**旧石器時代**　広島県山県郡芸北町・樽床遺跡，同郡大朝町・地宗寺遺跡，同郡吉和村・冠遺跡などがある。これらの遺跡での石器は安山岩をはじめ，流紋岩系，水晶，黒曜石など豊富な石材を用いている。しかし，冠遺跡は西日本でも屈指の安山岩の原産地であることから，石器の中で90％が安山岩で占めている。ナイフ型石器，スクレイパー，楔形石器など多量の石器類が出土している。

**縄文時代**　芸北町・樽床遺跡，大朝町・河原山遺跡，戸河内町・上殿遺跡などがある。樽床遺跡では早期から後期の土器片と石鏃が出土している。河原山遺跡では早期から後期の土器，磨製石斧，石鏃が出土し，上殿遺跡では押型文土器，石鏃，円型打製石器，石刃などが出土している。

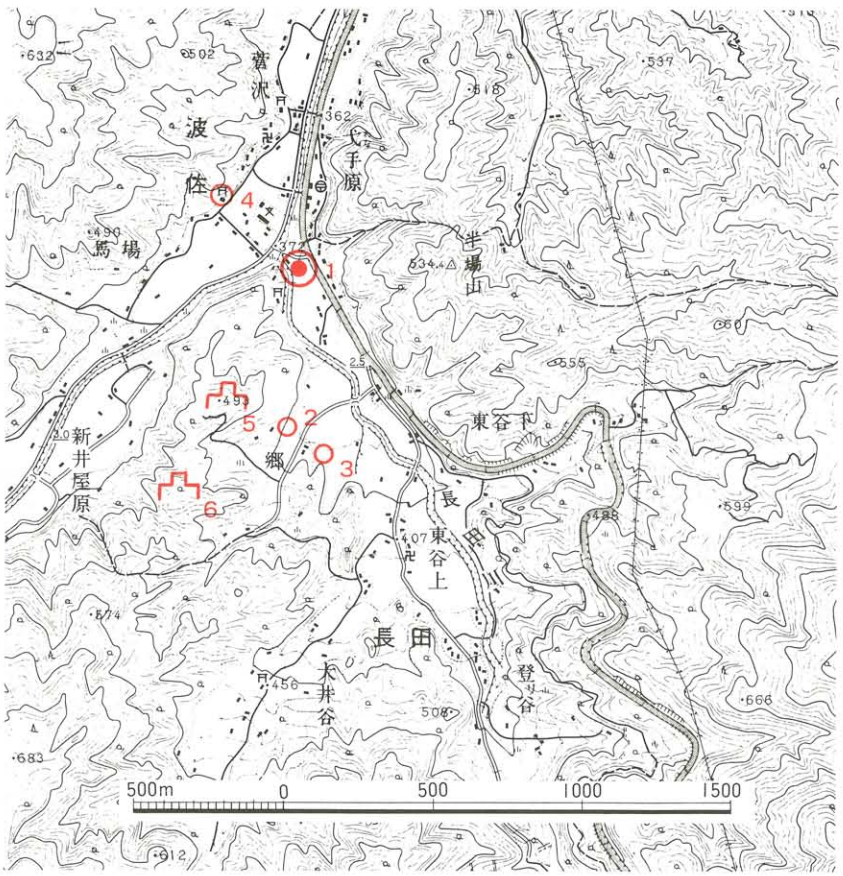
**弥生時代**　大朝町・横路遺跡，赤城遺跡，戸河内町・京之本遺跡，千代田町・塚迫遺跡，歳の神遺跡などがある。横路遺跡は前期から後期の遺跡で，住居跡や土壙など，歳の神遺跡では後期の四隅突出型墳丘墓が検出されている。

金城町内の遺跡は今福・岩塚Ⅱ遺跡（縄文時代前期の爪形文土器，後期の石鏃，磨石，叩石，石皿，石匙などの石器類が出土），上来原・郷田門遺跡（縄文時代の石斧出土），小国・柿ノ木遺跡（弥生時代の石斧出土），波佐・槇ケ曾根遺跡（縄文時代の石斧出土），長田・長田郷遺跡（縄文時代後期・晩期と弥生時代後期の土器，石鏃，石匙，磨石，石斧，

石錘，凹石，古墳時代前期の土師器，奈良時代から平安時代の須恵器と土師器および中世の中国産青磁などが出土），長田・長田郷Ⅱ遺跡（弥生時代の土器，石斧出土）などの遺跡が分布している。

古代以降，文献などによると長田別符，長田保，波佐庄などの名称を見ることができる。これらは，中国山地の優秀な真砂砂鉄から産する黒鉄（たたら鉄）の生産が大きく影響していると考えられる。波佐地区には，たたら製鉄跡が30数カ所あり，往古より産出し，豊富な木炭資源と水資源の恵まれた環境に立脚して経済基盤が確立していた。このため，中世以降，波佐一本松城を中心に黒鉄をめぐる攻防がくりひろげられたのである。

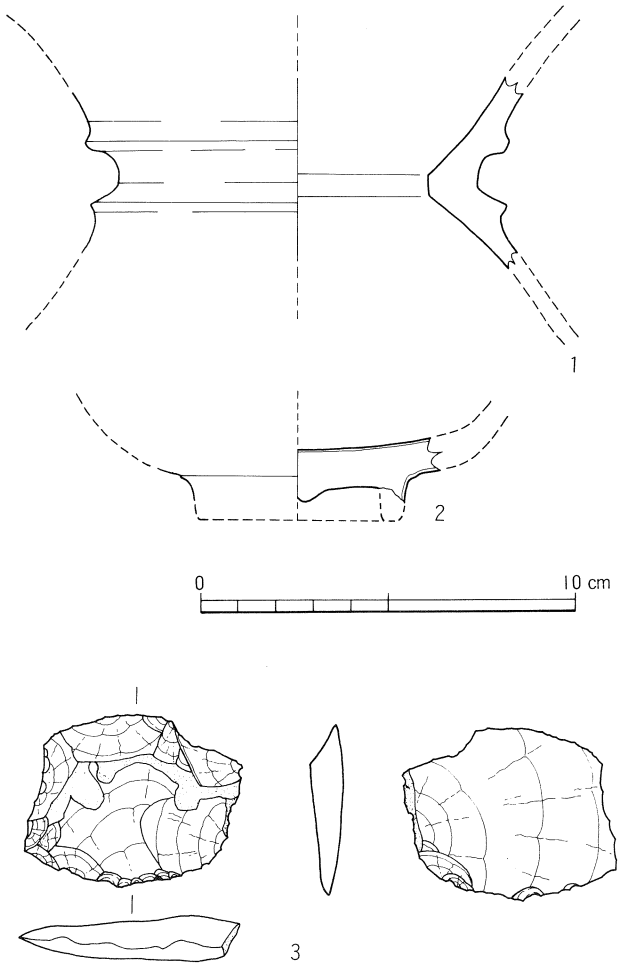
（隅　田）




第１図　七渡瀬遺跡と周辺の主要遺跡など
（1.七渡瀬遺跡，2.城ノ前遺跡，3.長田郷遺跡，4.常盤山八幡宮，5.波佐一本松城跡，6.水見城跡）

## 表１　長田郷遺跡出土遺物一覧表

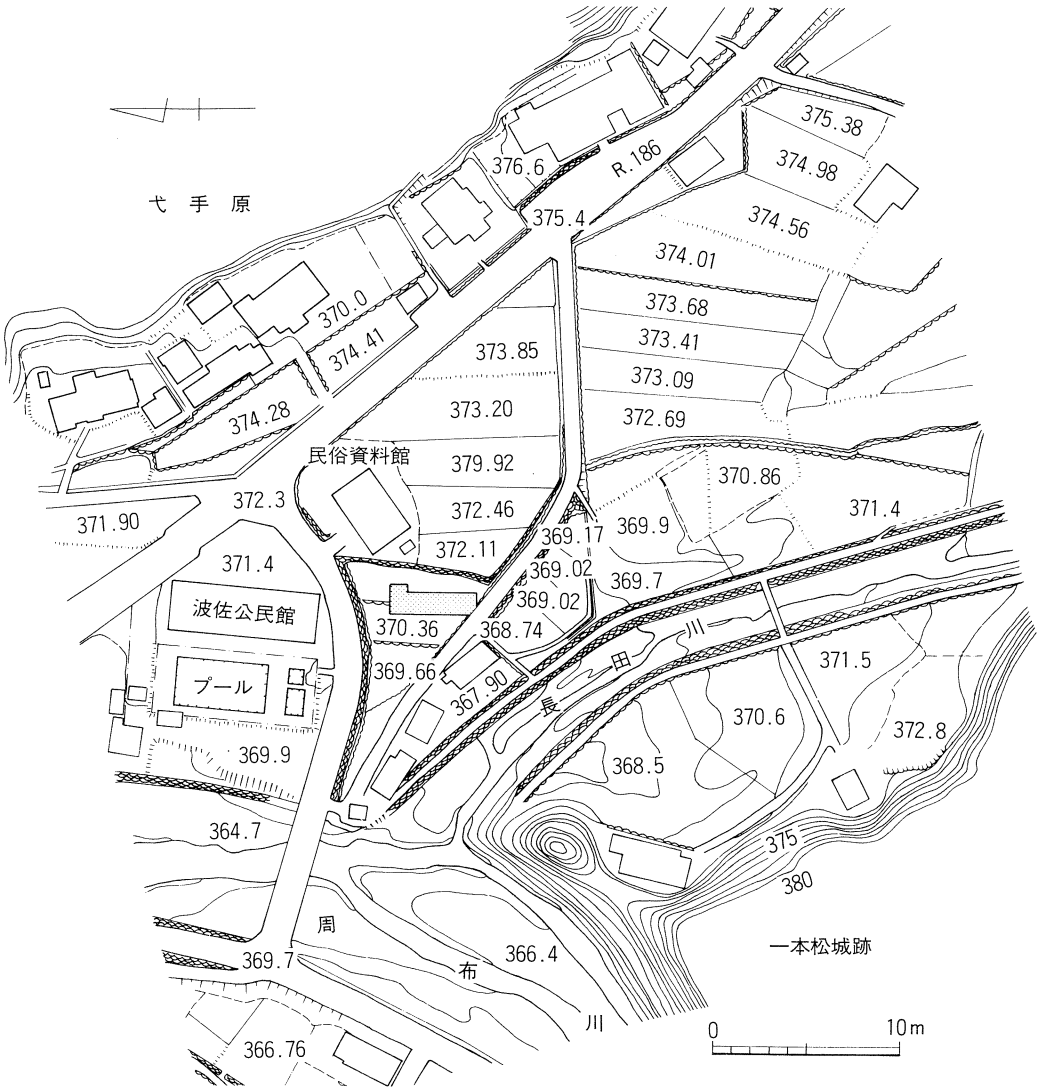
| 挿図番号 | 器　種 | 時　期 | 文　様 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 法　量 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ２－１ | 器台 | 古墳前期 | | 褐色砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 筒部径9.6cm | |
| ２－２ | 椀<br>（青磁） | 中　世 | 内面に線刻文様・<br>不明瞭 | 黒色砂粒含む | 良好 | 釉は淡緑色 | 底径　5.6cm | |
| ２－３ | スクレー<br>パー | | | | | | 長　4.5cm<br>幅　5.6cm<br>厚　0.9cm | 石材安山岩 |




第２図　長田郷遺跡出土遺物実測図
（1.土師器，2.青磁，3.石器）

# Ⅲ. 遺跡の概要

七渡瀬遺跡は周布川と長田川が合流する地点の，島根県那賀郡金城町波佐に所在する。立地は合流点から少し上がった長田川の河川段丘で，一帯は幅10m前後の小規模な棚田となっている。標高は370mである。遺跡は金城町立歴史民俗資料館の西側に隣接する一段低い水田にあり，その比高差は約２ｍを測る。




**第３図　七渡瀬遺跡の位置図**

調査地点は建設予定の地場産業技術研修センターの東端にあたり，調査区は建物部分の内，遺物包含層の残る東西21m×南北２mの42m²とした。調査時には耕作土（厚さ20cm）は既に重機により排除されており，発掘は厚さ30cmを測る礫混じりの黄褐色土層の客土から対象にした。なお，この土は地主によると10年前に入れたものという。客土以下の層序は厚さ10～40cmの暗褐色土層の遺物包含層および黄褐色砂礫層と黄褐色砂層の地山となり，ほとんど乱れはない。遺物包含層は北側が40cmと厚く，南側にかけて徐々に薄くなる。また，遺物の出土状況も北側が密で，南側にかけて少しずつ疎となり，南端付近では全く発見されない。これはもともと地山すなわち河川敷が上流部から下流部の北側にかけて緩やかに傾斜していたため，水田を耕作する以前に，その低い場所に遺物包含層が堆積したものと推定される。

### 遺　構

地山に掘り込まれた径20～50cmのピット７個と大小16個の凹地が検出された。ピットの多くには耕作土の灰色粘質土が入っており，これらは水田耕作以降にできたものである。残りのピットには暗褐色土があり，中世以前のものといえるが，建物には伴うかどうかは不明である。凹地の内部には暗褐色土がたまり，すべて浅く，地山の起伏の可能性が強い。

### 遺　物

遺物としては土器，陶磁器，石器が出土しており，量はコンテナー１箱程である。これらは総て細片となっており，ほとんどの破片は接合できない。その内訳は次のとおりで，弥生土器が８割を占め，他は僅かである。

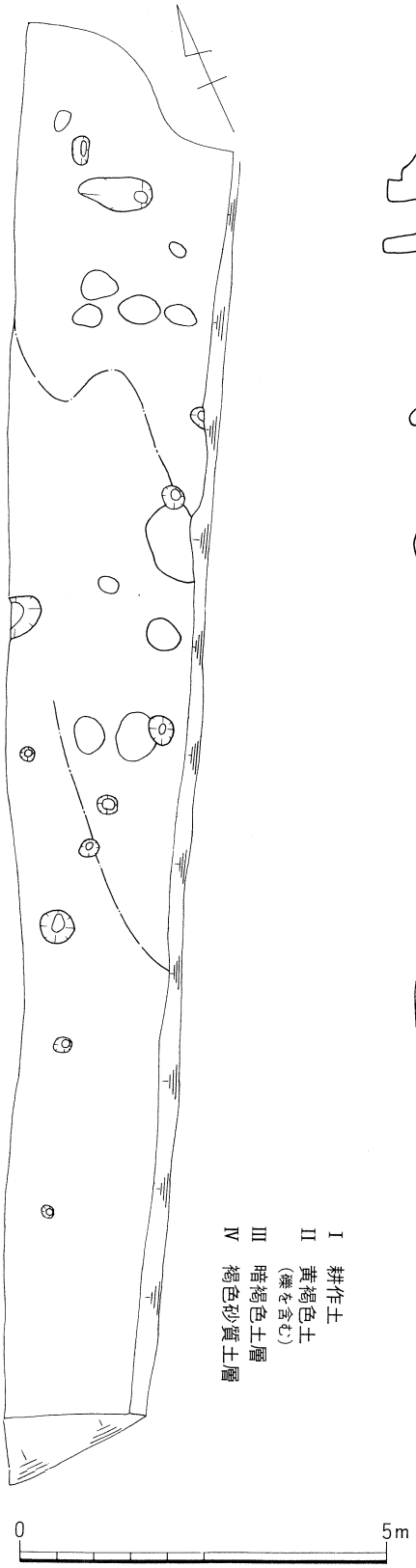
**表２　七渡瀬遺跡出土遺物一覧表**

| 種　別 | 内　訳 | 計 |
|---|---|---|
| 土　器 | 縄文土器10，弥生土器151，土師器７，須恵器12，土師質土器２ | 182 |
| 陶磁器 | 青磁１，その他２ | 3 |
| 石　器 | 石錐１，石鏃１，剥片７ | 9 |

土器には縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器がある。

### 縄文土器（第６図－１～４）

10片が出土している。総て細片で，器形が知れるものはない。内外面とも条痕をもち，縄文がつくものは認められない。胎土には大きな砂粒を含み，黄色および暗褐色を呈す。時期は不明だが，後期頃であろうか。

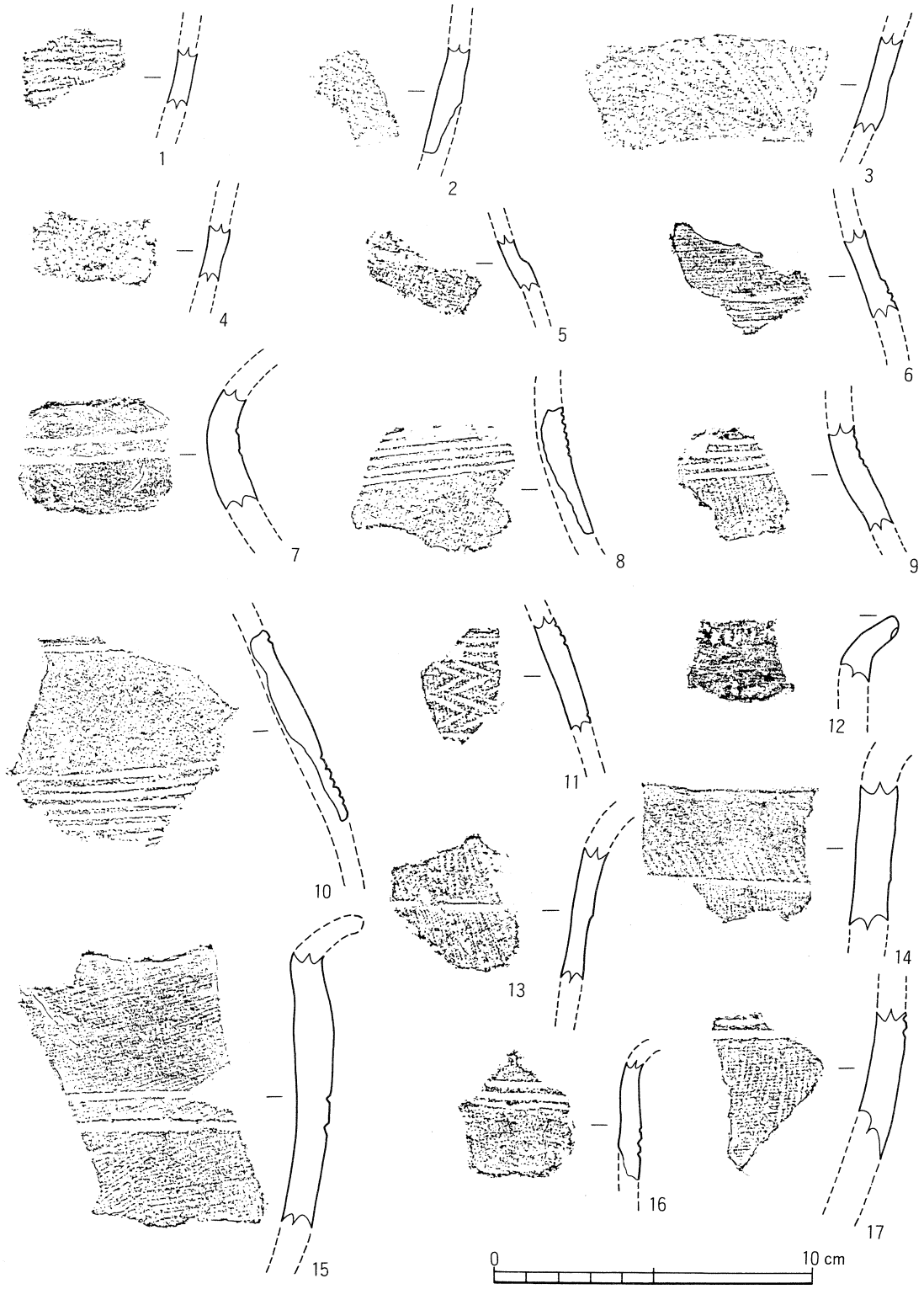



第４図　七渡瀬遺跡遺構図

第５図　七渡瀬遺跡遺物出土図

## 表３　七渡瀬遺跡出土土器一覧表

| 挿図番号 | 器　種 | 時　期 | 文　様　・　調　整 | 胎　　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6－1 | － | 縄文後期 | 表面条痕 | 粗<br>大粒の砂粒含む | 良好 | 暗茶褐色 | 時期推定 |
| 6－2 | － | 縄文後期 | 表面条痕 | 長石粒多く含む | 良好 | 暗褐色 | 時期推定 |
| 6－3 | － | 縄文後期 | 表面条痕 | 小砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 時期推定 |
| 6－4 | － | 縄文後期 | 表面条痕 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 時期推定 |
| 6－5 | 壺 | 弥生前期 | 表面ヘラ磨き<br>肩部に段 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－6 | 壺 | 弥生前期 | 表面ヘラ磨き<br>肩部に段と２条以上のヘラ磨き | 大粒の砂粒含む | 良好 | 暗褐色 | |
| 6－7 | 壺 | 弥生前期 | 頭部に２条のヘラ描き沈線文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－8 | 壺 | 弥生前期 | 肩部に６条以上の沈線文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－9 | 壺 | 弥生前期 | 表面ヘラ磨き<br>肩部に４条以上のヘラ描き沈線 | やや粗<br>大粒の砂粒含む | 良好 | 灰褐色 | |
| 6－10 | 壺 | 弥生前期 | 表面ヘラ磨き<br>肩部に２条以上のヘラ描き沈線<br>胸部に７条以上のヘラ描き沈線 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－11 | 壺 | 弥生前期 | ２枚目腹縁による平行沈線文<br>綾杉文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 白褐色 | |
| 6－12 | 甕 | 弥生前期 | 口縁部に刻目文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 茶褐色 | |
| 6－13 | 甕 | 弥生前期 | 表面ハケ目調整<br>肩部に段 | 粗<br>大粒の砂粒含む | 良好 | 黒　色 | |
| 6－14 | 甕 | 弥生前期 | 表面ハケ目調整<br>肩部に段 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－15 | 甕 | 弥生前期 | 表面ハケ目調整<br>肩部に２条のヘラ描き沈線文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 灰褐色 | |
| 6－16 | 甕 | 弥生前期 | 肩部に３条のヘラ描き沈線文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 6－17 | 甕 | 弥生前期 | 表面ハケ目調整<br>肩部に２条のヘラ描き沈線文 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | |
| 7－1 | 甕 | 弥生前期 | 口縁部に刻目文<br>肩部に２条の沈線文 | 大粒の砂粒含む | 好 | 灰白色 | 口径24.2cm |
| 7－2 | 底部 | 弥生前期 | 表面ハケ目 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 底径７cm |
| 7－3 | 底部 | 弥生前期 | 表面ハケ目 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 灰白色 | 底径8.4cm |
| 7－4 | 底部 | 弥生前期 | 表面ハケ目 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 底径9.8cm |
| 7－5 | 底部 | 弥生前期 | 表面ハケ目 | 白色砂粒含む | 良好 | 赤褐色 | 底径8.8cm |
| 7－6 | 底部 | 弥生前期 | 表面ハケ目 | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 底径14cm |
| 7－7 | 甕 | 弥生中期 | 表面ハケ目 | 白色砂粒少し含む | 良好 | 黄褐色 | 口径20cm |
| 7－8 | 甕 | 弥生中期 | ヨコナデ | 大粒の砂粒含む | 良好 | 黄褐色 | 口径25.8cm |
| 7－9 | 高坏 | 弥生中期 | 筒部に５条のヘラ描き沈線文 | 小粒白色砂粒含む | 良好 | 淡赤褐色 | 筒径5.2cm |
| 7－10 | 坏 | 中　　世 | | やや大粒の白色砂粒含む | 良好 | 黒灰色 | 口径14.8cm |
| 7－11 | 甕<br>（須恵器） | 奈良～<br>平安 | クシ描波状文 | 長石多く含む | 良好 | 青灰色 | |
| 7－12 | 碗<br>（陶器） | 中　　世 | 厚く釉かかる | 黒色小砂粒含む<br>密 | 良好 | 釉は<br>暗緑色 | 高台径６cm |




第６図　七渡瀬遺跡出土遺物実測図（1～4 縄文土器，5～17 弥生土器）

**弥生土器（第６図－５～17）**

壷，甕を中心に出土している。時期的には前期のものが多く，中期は僅かで，後期はほとんど認められない。

**前　期**　壷と甕がある。５～11は壷の頚部から胴部の破片。５，６は段をもつもので，６は段の下に２条以上のヘラ描き沈線が施されている。表面はヘラ磨きで仕上げる。７は頚部にヘラ描き沈線が２条，８～10は肩部に数条が引かれている。11はヘラ描き沈線の間に二枚貝腹縁による綾杉文が施されている。調整はハケで仕上げ，その後，ナデまたは磨きをするものもある。12～17は甕の破片。12は，口縁部が「く」の字状に外反し，口唇部に刻目を施す。13～17は胴部が張らないもので，13，14には段があり，15，16には２，３条のヘラ描き沈線を施す。内外面ともハケ目で調整し，一部ナデで仕上げるものもある。第７図－１は口縁部が短く外反し，口縁端面に刻目を施す。口縁部の下方には２条以上の沈線を引く。２～６は底部の破片で，平底である。調整が知れるものは荒いハケ目で仕上げられている。

**中　期**　甕と高坏がある。７，８とも甕の破片。７は短く外反する口縁部をもち，その端部は凹面をなす。胴部はあまり張らない。８はく字状に外反する口縁部をもつ。両者とも口縁部はヨコナデ，それ以下はハケ目で仕上げる。９は高坏で，坏部と脚部との境部分にあたる。外面には５条以上の沈線を描く。外面は縦方向の磨き，内面はヘラ削りで仕上げる。

**須恵器（第７図－11）**　甕の破片。大きく外反する口縁部の破片で，外面には二段にクシによる細かな波状文を描く。古墳時代後期。

**土師質土器（第７図－10）**　１片が出土している。小形の坏で，体部から口縁部にかけて大きく開くタイプのものである。内外面ともヨコナデで仕上げる。時期は定かではない。

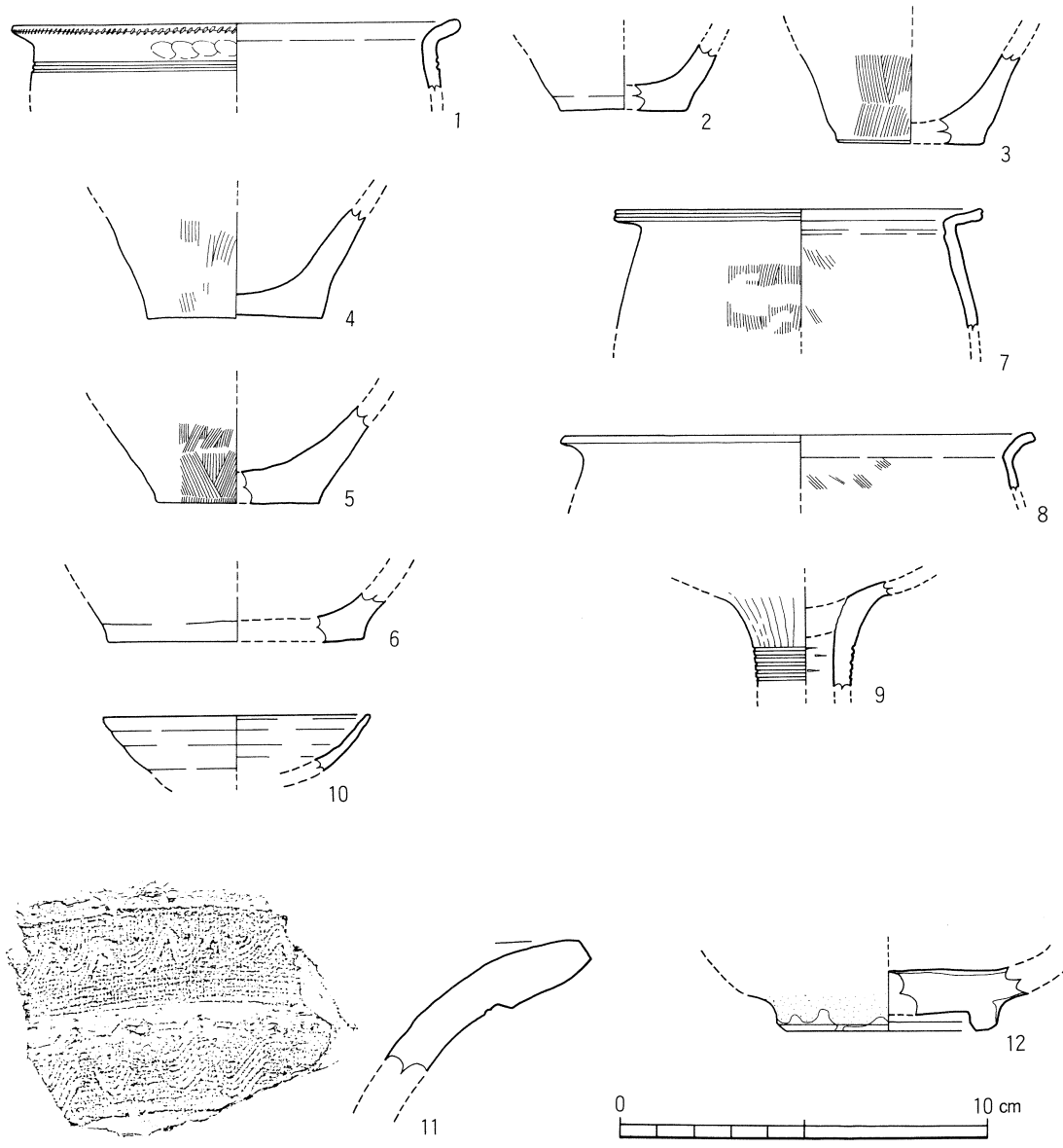
**陶磁器（第７図－12）**　中国製の青磁碗。高台をもち，表面には緑色の青磁釉が厚く被るが，高台内と畳付には及ばない。中世のもの。他に，近世以降のもの２片がある。

**石　　器**

安山岩の剝片５と黒曜石３とが出土している。このうち，製品としては安山岩の石錐と表採された石鏃が１個づつある。

**剝　片（第８図－２）**　安山岩の小片。だ円形を呈し，長さ2.1㎝，幅2.5㎝，厚さ0.5㎝を測る。刃こぼれ状の痕跡が認められる。

**石　錐（第８図－３）**　長さ2.4㎝，幅1.9㎝，厚さ0.3㎝で，先端および側縁に剝離が集中している。つまみ部は平たく，側面に自然面を残す。




**第７図　七渡瀬遺跡出土遺物実測図（1～9弥生土器，10土師質土器，11須恵器，12青磁）**

**残　核**（第８図－１）　長さ2.4cm，幅1.9cm，厚さ0.3cmの黒曜石である。各方向から取り尽くされたものである。楔形石器の可能性もある。　（西尾・柳浦）

**表４　七渡瀬遺跡出土遺物一覧表（石器）**

| 挿図番号 | 器　種 | 器　材 | 法　　量 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| ８－１ | 残　核 | 黒曜石 | 長　3cm　幅　1.6cm　厚　1.6cm | 上・下部につぶれ |
| ８－２ | 剝　離 | 安山岩 | 長　2.1cm　幅　2.5cm　厚　0.5cm | |
| ８－３ | 石　錐 | 安山岩 | 長　2.4cm　幅　1.9cm　厚　0.3cm | |

# Ⅳ．小　　結

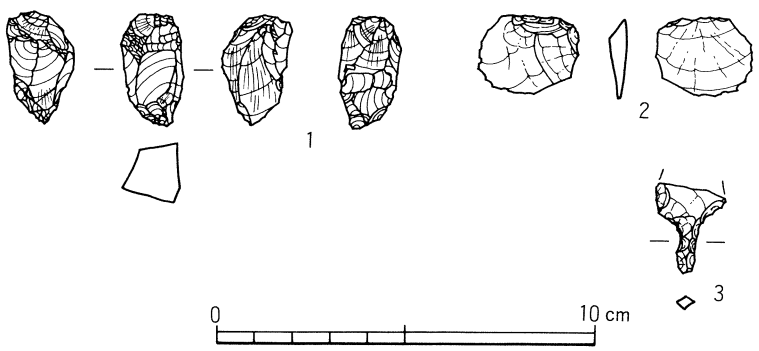
七渡瀬遺跡は，調査の結果，縄文時代から弥生時代中期前半，古墳時代後期および中世にかけての複合遺跡であることが知られた。その中心は弥生時代前期である。しかし，遺構では，ピットなどが検出されたが，古い時代のものは認められなかった。遺物は，調査地の立地や出土状況および細片に限られていることより，山際の一段高い水田部からの二次的に移動したものと判断される。よって，遺跡の中心部は国道沿いの河岸段丘上と推定される。

縄文土器は10片と僅かである。時期が判るものはない。石器も少量出土している。その多くは安山岩系であるが，黒曜石も僅かに混じる。黒曜石は本文中の分析結果によると，隠岐産であることが確認されており，広範囲の交流を裏付ける資料でもある。

弥生土器は151片と多く，その大部分は前期のものである。石見地方山間部において前期の土器は必ずしも多くはなく，周布川上流域の波佐地域においては初見である。前期の最古に属する土器はないものの，中国山地における弥生文化の成立を解明するうえで貴重な遺跡である。

その他に，須恵器・土師器・土師質土器・陶磁器が混じって発見されている。このことは古墳時代以降，各時代の生活の舞台にもなっていたこと示している。

今後，波佐地域の歴史を解明するうえで周辺部調査が期待される。　　（西　尾）




**第８図　七渡瀬遺跡出土遺物実測図（石器）**

# 金城町七渡瀬遺跡から出土した黒曜石片の原産地について

島根大学教育学部教授　三　浦　　清

## 1．まえがき

金城町教育委員会から持ち込まれた七渡瀬遺跡から出土した黒曜石についてその原産地を検討した。

## 2．研究方法

黒曜石の石基部分の化学組成は原産地ごとに特徴を有することが三浦（1987）によって明らかにされた。本研究はそれに従ってエネルギー分散形X線マイクロアナライザーによって石基部分の化学組成が求められた。

試料は二点で，その番号は614と198である。その結果は附図で示す。この図では614が黒色，198が白色の記号で示されている。（番号は遺物取りあげ時のもの）

## 3．研究結果

図には化学成分のうち，MgO，CaO，FeO，$Na_2O$，$K_2O$，$Al_2O_3$について示してある。これらの成分の動行については産地ごとに極めて特徴をもち，三浦（前出）が示した図と比較することによってその産地が推定される。

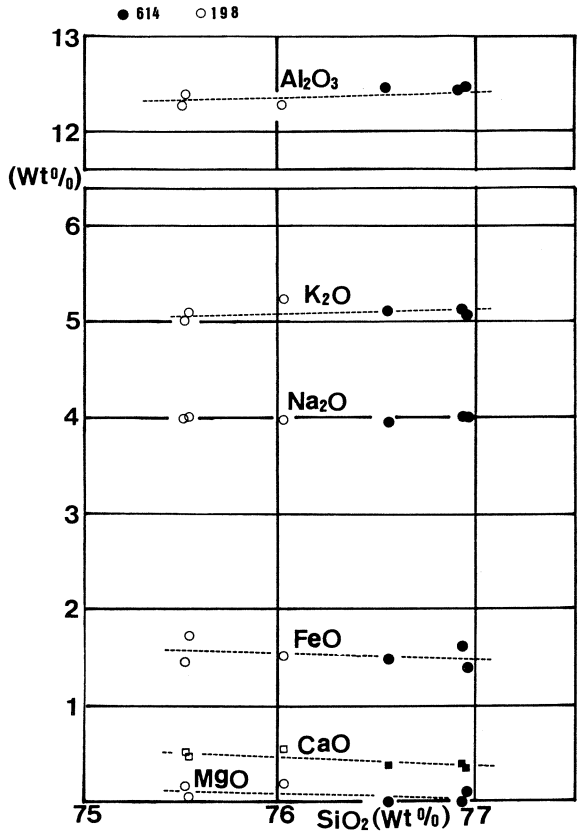
## 4．黒曜石の現産地について

三浦（前出）の図に従えば，二試料ともに隠岐久見型と判定される。特に，この型は$K_2O$に富み，その値が約５％，$Na_2O$が約４％，FeOが1.5％前後で，$Al_2O_3$が12.5％前後にその特徴をもち，九州方面とはその組成において差をもっている。

なお，隠岐原産のものにもこの久見型のほかに，筆者が男池型とした別の特徴をもつものがある。

## 5．あとがき

X線マイクロアナライザーによる黒曜石の石基部分の化学組成は産地ごとに特徴があって前述のように三浦（前出）によって詳細に議論された。その結果，隠岐久見型である




金城町波佐の七渡瀬遺跡から出土した黒曜石片の石基部分の
エネルギー分散形X線マイクロアナライザーによる化学分析値

ことは確かであろう。

一方，黒曜石の原産地推定の方法としては藁科ら（1985）による岩石の微量成分の特徴を検討することによってなされる。

この二つの方法から原産地を判定された結果は殆んど完全に一致すると言ってよいであろう。

なお，筆者がここで久見型としたものは，久見の露頭の試料について検討したものと同じ型に属すると言うことで必ずしも久見原産と言うことではない。この型を示すものは島後の各地にある模様で，その意味では隠岐島後原産の一種と言う表現が正しい。

【文　献】

藁科哲雄・東村武信(1985)：西日本地域の黒曜石研究，考古学ジャーナル，244，12−17。

三浦　清(1986)：黒曜石小考 — 島根県下の縄文遺跡から出土する黒曜石の原産地推定法をめぐって —，島根大学教育学部紀要（自然科学編），20，45−61。

# 図　　版

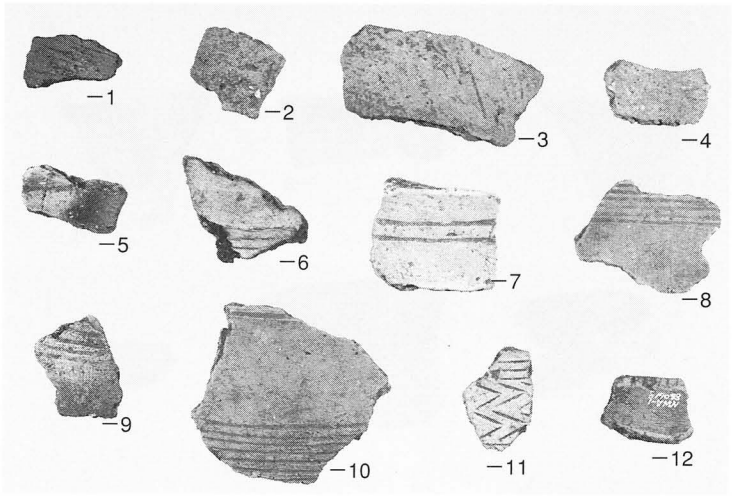
七渡瀬遺跡近景
（北西より）

七渡瀬遺跡の調査区（北より）

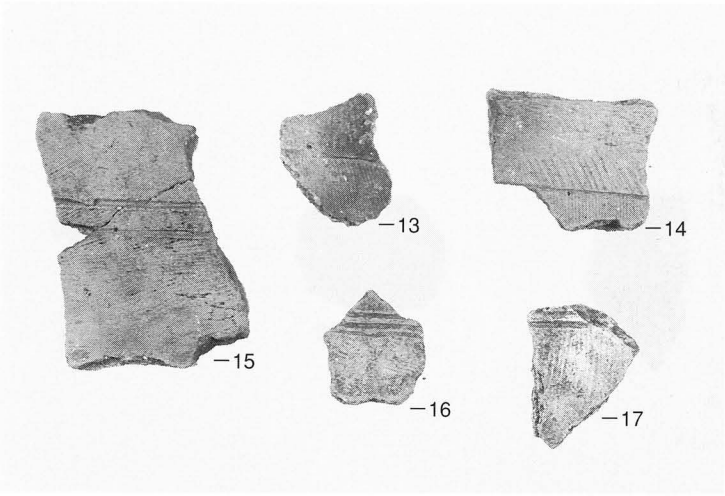
図版2

七渡瀬遺跡の遺物出土状況（北より）

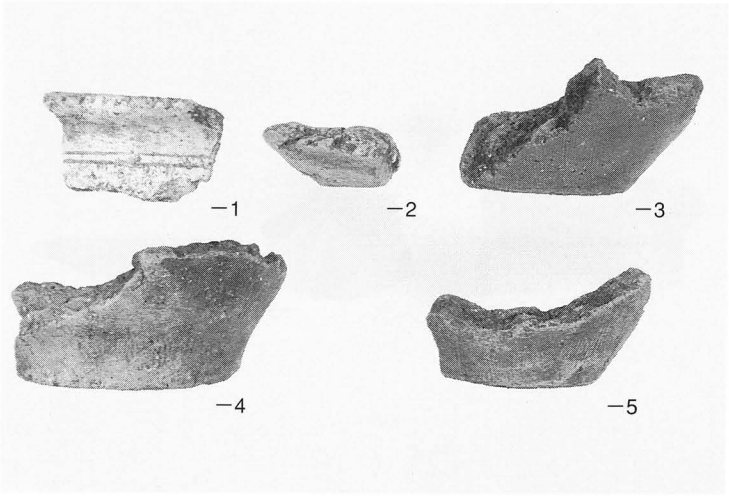
七渡瀬遺跡の発掘後の調査区（北より）




七渡瀬遺跡出土土器

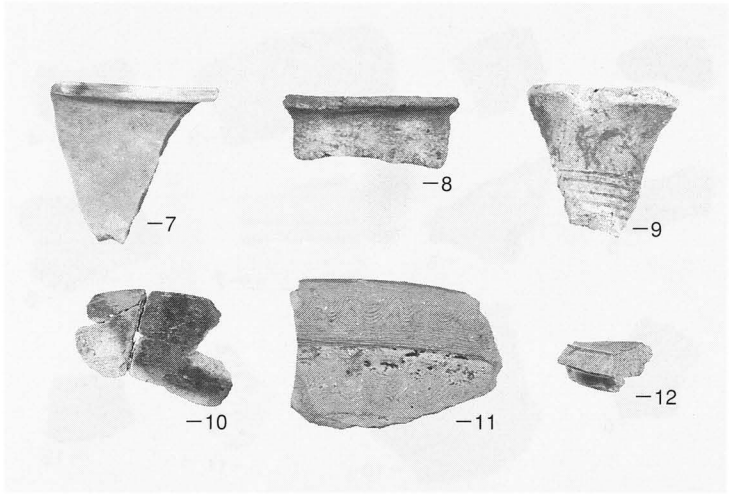



七渡瀬遺跡出土土器

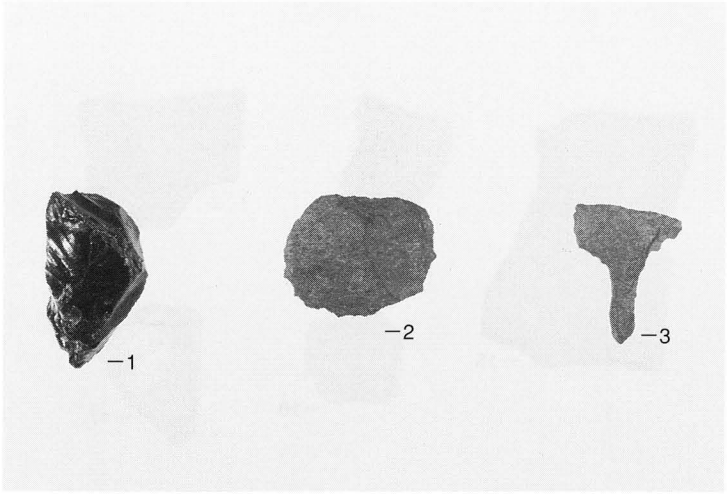



七渡瀬遺跡出土土器

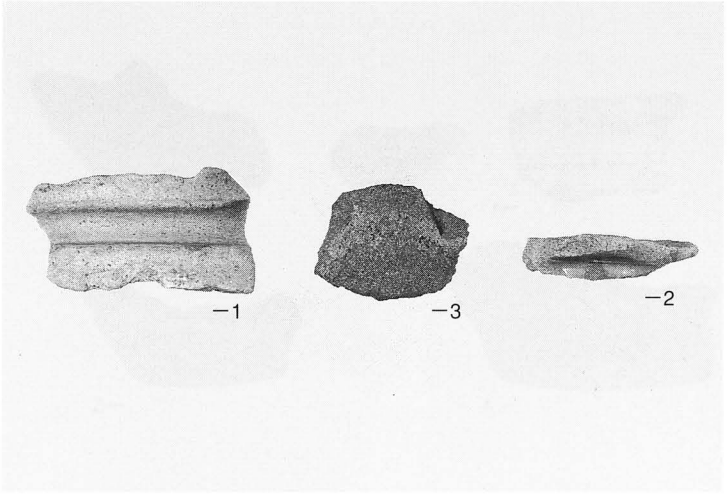
図版4




七渡瀬遺跡出土土器・陶磁器




七渡瀬遺跡出土石器




長田郷遺跡出土土器・石器

**七渡瀬遺跡発掘調査報告書**

1987年３月

発　行　　金城町教育委員会
　　那賀郡金城町大字下来原171

印　刷　　有限会社　谷口印刷